

トルコの旅より

— 退行と進歩 —

鴨 澤 巖

本年(1979年)の夏から初秋にかけて1カ月間トルコに旅行した。8月13日の朝成田を発ち、9月16日の夜成田に帰着したこの旅行は、私にとって5度目のトルコ旅行である。公的な旅費によって束縛されることもなく、まったく自由に設定したこの旅行の目的は2つあった。1つは、1975年冬以降接していないこの国の近況を自分の目で見、若干の資料を得ることであり、他の1つは近い将来に行うことができるかも知れない農村調査の下調べをすることであった。

この2つの目的は予想以上に達成できたと思っているが、この目的達成の副産物として、本稿の副題に掲げた「退行と進歩」についていささか考えさせられるところがあった。ここに備忘的に記しておきたい。

1 「退行」について

1950年前後の2年間、アナトリア中央部の都市カイセリ Kayseri の近郊農村に住みこんだ文化人類学者のポール・スターリング P. Stirling は、村に国法はないにひとしいことを記している (Stirling, 1965, p. 209)。しかし資本主義体制の担い手としての国家の役割はその後増大してきた。それは農村においてそうであっただけでなく、大都市において農民を受け入れてきたゲジェコンドゥ gecekondu (トルコにおける spontaneous settlement) においてはもっとそうであった。1950年代初期から始まった農村のトラクター化によって、多数の農民が離村し大都市に向かった。大都市に安定した高収入の

雇用がある訳ではなく、農村から流入した人口はいわゆるマージナル・ポピュレーション marginal population (たとえば Roberts, 1978, p. 30, 参照) となる。かれらが住む集落はマージナルな集落 marginal settlements (たとえば ibid, p. 150, 参照) で、ゲジェコンドゥはまさにマージナルな集落である。ゲジェコンドゥは字義どおりに解すれば「一夜建て」の意で、英語では "built overnight" (Karpat, 1976, p.11) である。トルコ語でゲジェ gece は夜であり、コンドゥ konu は、koymak 置く、の受動態の過去形である。公共の許可なく一夜のうちに国有地内に家屋を建てることからこの名がある。

たとえばトルコの首都アンカラ Ankara 全人口に対する同市のゲジェコンドゥ地区の人口は、過少に見積もっても、1970年には60%に達している (ibid, p. 13)。

マージナリティーは栗原尚子(栗原, 1977) やブライアン・ロバーツ Bryan Roberts (Roberts, 1978, p. 136) も記しているようにラテン・アメリカ社会の分析にはきわめて重要な概念となっている。だがそれはトルコ社会の分析にとっても不可欠の概念であり、ゲジェコンドゥを研究したケマル・カルパット Kemal H. Karpat も、この概念の有効性を指摘している (Karpat, 1976)。アンカラのゲジェコンドゥ地区人口の全市人口に対する構成比の大きさを一瞥するだけでもこのことは首肯できよう。

マージナリティーは、現代のトルコで、靴磨き、花売り、ポーター、自動車見張り人といっ

たマージナルな仕事に従事するゲジェコンドゥ地区住民に限って現われるものではない。年率70%に達するおそるべきインフレーション（鴨澤，1979 b, p.33）のもとでは公務員でさえしばしばマージナルな仕事に手を出しており、トルコではいまマージナリティーの度合いが高進しているように見受けられる。その反面、それだけ政府の力は後退していると考えられる。かつて増大してきた政府の力の後退は、少なくとも政治・経済的な面では一種の退行現象であろう。

今回の旅行での見聞から私はマージナリティーの度合いの増大を推測してはいるが、この増大の度合いは直接に統計などによって明示はしがたい。マージナルな経済の性格がそれを許さないからである。以下、旅行での見聞の断片なるべく客観的な文脈中に置きながら、「退行」について語ってみよう。

1万5000トルコ・リラ（1リラは1979年8月、9月現在で約5円）の月給の公務員が1万5000トルコ・リラの家賃のアパートに入居していることも珍しくない、という話を聞いた。なんらかの別途収入があるのである。奥さんが外で働いている場合が多い。ただし、これは一般にはマージナルな仕事とは無関係であろう。公務員としての勤務時間の終了後に第2の仕事をする人も多い。8月22日の夜、アンカラからイズミル Izmir に飛び、空港から乗ったタクシーの運転手は、昼間は公務員で夕方から運転手をしていると言っていた。この場合の第2の仕事は、正規の仕事外の仕事という点でマージナルな側面をもっているようである。もっと崩れれば、インフレーションを利用して各種の物ころがしをやるとか、地位を利用しての特別収入に精を出すことになる。今年に入ってからのことだが、税関吏のわいろ横行の話に憤慨した担当大臣が草木も眠るうしみつ時、税関に潜入してついにわいろ授受の現場を押さえ、不正行為を

たしなめたところ、居合わせた税関吏が皆出てきて、われわれの家計維持に必要な収入の道を断とうとするとはなんたる横暴と口々にくっかかり、ほうほうの体でその場は立ち去ったものの、腹の虫が治まらない大臣が綱紀粛正の通達を立案中、次官の抵抗に会ってついに断念、実施したのは結局、わいろ収入の機会の公平化のため任地を3カ月ごとに替えることであったという。また、昨年11月には自動車免許取得のさいに支払うわいろの額を平等にすることはできないのかという質問が国会で公然と行われたという。

家計補助のために定常化したわいろはマージナルな性格を帯びると思われる。従来トルコではこんなに公然とわいろについて語られることはなかったし、人々もまたわいろとはあまり深い関係もなく生活してこられたように思う。

公務員がマージナル・セクターとの関連を深めるとき、民間の人々もまた同様の動きをする。たとえば大学の食堂の従業員は昼食の営業が終わると、夕方から夜にかけて別の仕事で働くという。これはマージナル・セクターにおける就業とみなすことができる。このような就業は税務当局に捕捉されることもなく、統計に載るようなこともないようである。

このような事情であるから、統計が表現する生活危機は必ずしも民衆の生活実態を正しく反映してはいない。

個人水準におけるこのような不一致を大きく超えて、統計から把握される生産の危機的状況と生産の実態とのかなりの不一致がある。

つぎのような話を、的確な分析で知られる某社会学者から聞いた。ヨーロッパとアジアを結ぶハイウェイを通る1日1000台ほどの国際トラック便のうちの若干が忽然とアナトリアでトラックごと消えてしまうことが珍しくないという。たとえば、西ドイツを出発してイランに向かう機械を塔載したトラックがなくなってしまう

うのだという。その真相は、もともと名を隠していたトルコ人の荷主がいて、(深刻な外貨不足から輸入の禁止を続けている)政府の目をごまかすために架空のイラン人荷主を創り、機械をアナトリアまで運んだところで真の荷主が機械を引取り、トラックは部品にまで解体して売り飛ばしてしまうのだという。税関吏も、この密輸を差止めればトルコ経済が参ってしまうので黙認(といっても黙認料は受取るのであろうが)するのだという。

トルコ共和国は1930年代前半以降、国営企業主義を前面に押し立てながら経済の発展をはかってきた。外資はほとんど流入せず、国内の資金も産業投資には向きにくかったトルコで、国家が先頭に立って国民経済を推進してきた。国民経済における国家の役割はけだし大きなものがあつた。しかし、いまや政府は経済危機に喘ぎ、国民経済を指導する力を失ってしまった。現在のトルコ経済を論ずる西欧のジャーナリズムも政府水準での危機的状況に焦点を合わせて描写と批判を展開している(鴨澤, 1977b, 1979b, 参照)。だが政府水準の経済危機が必ずしもそのまま国民経済の全面的な危機を表現していない点については、西欧のジャーナリズムも指摘しないし、私自身も十分にはそのことをわからずにいた(鴨澤, 1977, 1979b)。統計や公的資料に依拠し過ぎるための失敗である。

発展途上国における政治的・経済的・社会的諸現象は、経済的に発展した諸国のそれとは運動法則を異にすることをあらためて思い知らされたのがこのたびの旅であった。

さて発展途上国ということを持ち出すならば、本節の表題に掲げた「退行」は、連接 articulation における「接ぎ目」の逆行的拡大とみなすべきではないだろうか。連接、すなわち資本主義と前資本主義との連接、のもとでの低開発の発展のもとで生じたマージナリティーは、必ずしも逆行を許さないものとして解釈されるべき

ではないであろう(Roberts, 1978, p.159以下参照)。

さて、この逆行を裏づける大状況として、資本主義的發展の停滞を示す統計的現象を挙げておこう。それは70年代中葉における農業の地域的分業の退行現象であつて、国内、国際両面にわたつて観察される。

いま、トルコ共和国67県の各県における工業用作物および油性作物の播種面積の各県の総播種面積に対する構成比を算出し、全国の標準偏差をみると、その値は1970~76年の3カ年平均では133.25であるが、1974~76年の3カ年平均では118.54である(資料: State Institute of Statistics, Turkey, 1975a, 1978a)。この標準偏差の値の縮小は商業的作物に関する地域的特化の退行とみなすことができる。農業面における資本主義の進行の停滞を表現しているともよいであろう。

以上の国内の現象は農産物輸出の停滞に関連しているのもので、国際的な面でも分業の退行がみられる。

主要輸出農産物輸出額の総輸出額に対する比率は70年代前半から後半にかけて低下している。すなわち、乾燥いちじく、いちじくピューレー、生鮮ぶどう、乾燥ぶどう、ヘーゼルナッツ、ピスタチオ、オリーブ油、綿実油油粕、ひまわり油油粕、葉たばこ、綿花、柑橘類の輸出額合計の総輸出額に対する百分比は、1972年が58.5%、1973年が54.3%、1976年が51.5%、1977年が47.4%となっている(資料: 同前)。

国際面におけるこの状況をふたたび国内面にもちこんで考察してみよう。3大主要輸出農産物である綿花(対総輸出額20%程度)、葉たばこおよびヘーゼルナッツ(同、各10%程度)のそれぞれに関し、全国総生産高に対する構成比が5%以上の水準にある主要生産県の生産高の合計が何%に達するかを1970、71年平均と1975、76年平均に関して算出すると、綿花は83%と69

第1表 3大輸出作物の輸出の推移(指数)

	数 量				金 額			
	1972年	1973年	1976年	1977年	1972年	1973年	1976年	1977年
ヘーゼルナッツ	100.0	100.3	147.0	155.8	100.0	109.0	211.9	288.5
葉たばこ	100.0	87.5	60.4	49.7	100.0	104.8	225.7	184.5
綿 花	100.0	115.9	151.1	59.7	100.0	150.3	276.3	149.2

資料: State Institute of Statistics, Turkey, 1975a, 1978a

%, 葉たばこは67%と61%, ヘーゼルナッツは95%と95%となる(資料: State Institute of Statistics, Turkey, 1975b, State Institute of Statistics, Turkey, 1978b)。ヘーゼルナッツが横ばいの他はいずれも主産地の比重の低下が, したがって国内の地域的分業の鈍化が読み取れる。ちなみにヘーゼルナッツは上記3大輸出作物の中ではただ1つ, 1972, 73年から1976, 77年にかけて一貫して数量面でも金額面でも輸出を伸長させている作物である(第1表)。なお第1表の金額欄ではインフレーションによる貨幣の減価を修正していないので, 外見上輸出は順調に進展しているように見える。

以上, 農業の面を通じて資本主義の停滞を考察してきた。工業の面ではどうであろうか。

第2表にみるとおり, 民間セクターの比重が大きな古い工業地とは違って新しい工業地(コジャエリ, イチェル, ゾングルダク, アンカラ)では国家セクターの比重の方が大きい。これは, 1930年代から始まったエタティズム(国営企業主義を中心としたトルコ共和国の国家資本主義)

が国内の工業未発展地に国家セクターの工業を配置し, 地下資源の所在地に国営の工場を新設し, 小工業地に国営の大工場を設立するといったことが行われてきたからである。

国家セクターの活動が衰退すれば, 投資は新開地の開発には向かわず, 集積の利益を求めて伝統的な工業地に向かうことになる。第2表が一定の期間の結果を表示しているとすれば, 第3表は1960年代中葉の動向を表示している。

主要工業地帯への工業の集中は, 対全国構成比に見られるとおり, 両セクターのそれぞれで進展してはいるが, その進展の度合いが民間セクターでは大層緩かであるのに国家セクターでは極めて急激である。さらに主要8県の内部では, 変異係数が示すように, 民間セクターでは均等化の方向をたどっているのに, 国家セクターでは分極化の方向をたどっている。すなわち, 国家セクターでは, 既成大工場地への一層の集中傾向が見られる。かりにもし工業的未・低開発地への工業の展開をもって進歩とするならばここにみる動向は国家セクターがもはや進歩的

第2表 8大工業県セクター別付加価値構成比(1971年) ただし, 就業者9人以下の事業場を除く

県 名	イスタンブール	コジャエリ	イチェル	イズミル	ゾングルダク	アンカラ	アダナ	ブルサ	全 国
国 家 セクター	39.9%	11.3	7.3	6.8	6.3	3.8	3.3	2.7	100.0
民 間 セクター	58.0	6.7	2.1	9.7	0.2	2.7	5.9	5.0	100.0

資料: State Institute of Statistics, Turkey, 1977

第3表 セクター別8大工業県付加価値生産額の推移（100万トルコ・リラ）

地 域	両セクター計		国家セクター		民間セクター	
	1964年	1968年	1964年	1968年	1964年	1968年
全 国	8,073	19,765	4,161	11,618	3,912	8,147
主 要 8 県	5,510	14,784	2,063	8,206	3,445	7,277
対全国構成比	(68.25%)	(74.80%)	(49.58%)	(70.63%)	(88.06%)	(89.32%)
ア ダ ナ	261	629	53	147	207	482
ア ン カ ラ	491	208	387	695	104	213
ブ ル サ	208	373	93	144	115	228
イ チ ュ ル	160	1,812	79	1,738	81	74
イスタンブル	2,819	6,726	456	1,912	2,363	4,814
イ ズ ミ ル	775	1,556	301	707	473	849
コ ジャ エ リ	466	2,026	377	1,442	89	584
ゾングルダク	330	1,454	317	1,421	13	33
8 県 間 変異係数	1.1981	1.0552	0.5762	0.6340	1.7233	1.6469

資料：第2表に同じ

な役割を果たしていないことを示している。

国家セクターの工業が既成工業地への集中を推し進めているのは、政府水準における経済的危機が工業的未・低開発地への工業の進出のゆとりをなくさせ、ひたすら集積の利益を追求して既成工業地への追加投資の比重を高めているからである（鴨澤，1979a，p.115参照）。

こうして、農業でも工業でも統計的に退行現象が観察され、そのような状況下で、政府の力の衰退、マージナリティーの度合の高進が旅行者の目にも映ることとなるのである。

2 「進歩」について

1979年8月30日、私はイズミル西方のバーデムレール村 Bademler Köyü を訪れた。この村はトルコではきわめて例外的な村である。この村の見聞を通じて「進歩」について語ってみたい。

バーデムレール村はイズミルからまっすぐ西

にチェシメ Çeşme に向かう道のちょうどなかほどから少し南下した所にある、人口813人、200戸の村である。家族計画が普及していて、トルコの農村としては驚くほど家族の平均人員が少ない。トルコでは開発が進んだ地域ほど多くの出稼ぎ者が外国（その多くは西ドイツ）に行くが（鴨澤，1977a，p.43参照）、この村からは現在300人以上（上記の村の人口の外）が西ドイツに行っている。これは大変な数である。村では35kmの所にあるイズミル向けに野菜や果実やぶどうや堅果（ナッツ）を栽培していて、大層富裕である。ちなみに村名のバーデムレールはアーモンドの樹（複数）を意味する。村内にはその名に背かずアーモンドの樹が多い。

だが、この村はその富裕さの点でトルコできわめて例外的であるという訳ではない。文化の面でこそきわめて例外的なのである。

この村もイスラームであるが、村にはイスラーム教会というものが無い。貧しいために教会

がないということはあっても、その他の理由で教会がないということはトルコではまずあり得ないことである。そのあり得ないことがこの村では見られるのである。

この村では、役場や茶店（チャイハネ）のある中心の広場に人々が集まる夕方、若い男女が道端で話し込んでいる姿が普通に見られるし、また茶店に女性が入る姿さえ見られるのである。男女の隔離を基本とするトルコの農村でこれはごく珍しいことである。

驚いたことには女性の郵便配達人がいた。男女の隔離はこの村にはまったくないようである。

夜、農協組合長ムラト・バラン Murat Baran 氏の作り小屋で食事をす。奥さんや親戚の女性も一緒である。女性も一緒に男の客、それも外国人との食事の席につらなるなどということ、開発の進んだ西部の農村でもあることではない。皆が一緒にビールで乾杯し、宴が進むにつれて数人の男女が民族舞踊を踊り始めた。その夜の話は原爆と人間性などであった。

翌朝、村の茶店で茶を飲んだ。壁にはメーデーの写真（おそらくイズミル市内で撮影された写真）が貼ってあり、掲示されていたアタチュルク Atatürk の言葉は「真実を語るに憚るなかれ！」というものであった。アタチュルクの言葉のなかでもこのようなものを掲げるのは、どうも一般的ではないように思う。

ムラトさんによれば、この村の人々は
1に何事にもまして人間性を言い、
2にトルコ人であるべしと言い、
3にイスラーム教徒であるべきことを言う、
というのである。

この村には、よその村なら教会があるべき所に劇場が位置を占めている。毎年この劇場では村人が演劇を上演するという。昨年は、ベルリン映画祭で1位になったフィルムの脚本を脚色して上演したとかいうことであって、劇場の壁にはその写真が貼ってあった。女優も登場する

ことはもちろんである。この劇場は1932年に村の先生が創設したとのことである。どういう経緯でそういうことになり、またその後も廃止されることなく維持運営されてきたのかは再訪の機会にきくほかはないが、とにかくトルコではまったく異色の農村であることは多言を要しない。

ムラトさんは胸を張ってこう言っているのけたものである。「バーデムレール村は文化的にはトルコで最も進歩した村です。」

そうなった原因を尋ねると、学校を卒業した村の子が村に戻ったこと、村を出た人々がしょっちゅう村へ来ることをムラトさんは挙げた。しかし、そうだとしてもそれはまたなぜかということがあろう。原因はともかく、私はこの村で人間性を重んじるということが常に言われ、男女の隔離はないように思われ、さらに絶えず外に目を向け開放的である点は進歩的な点とみなし得ると思う。かつて私は「西ドイツに滞在するトルコ人男子労働者の3人に1人が西ドイツの家族構造を退廃的で非難に値するものとみなしているのに対し、トルコ人女子労働者はそれを自分たちにほぼ適したものとみなしている。彼女らは夫妻の平等を好み、西ドイツで女性の地位が高いのを評価している」との文章（Castles & Kosack, 1973, p. 362 参照）につづけて「ここには社会的進歩の軸のありかが垣間見えているのである」と記した（鴨澤, 1977, p. 54）。西欧化を進歩であると規定することは錯誤であるが、差別の縮小や開放性の進展は進歩であると思う。

周辺の村とは異質的なこの村がトルコ社会の進歩の点で今後どのような役割を果たしていくかということは、この村がなぜこのような特徴をもつにいたったかという謎解きとともに、きわめて興味のあるところである。

参 考 文 献

- 鴨澤 巖, 1977 a, 西ドイツのトルコ人出稼ぎ労働者——ルール石炭株式会社寄宿寮のトルコ人労働者を中心に——, 法政大学文学部紀要, 第23号, pp. 31~93
- , 1977 b, トルコ経済よ, どこへ行く, 中東通報, No. 254 (1977, 11~12号), pp. 19~27
- , 1979 a, トルコ共和国の地域開発政策, 昭和53年度文部省科学研究費(総合研究A)報告書, 課題番号238029, 研究代表者, 鴨澤 巖, pp. 107~122
- , 1979 b, トルコ共和国第IV次5カ年開発計画(1979~1983)をめぐって, 中東通報, No. 265 (1979, 7号), pp. 30~42
- 栗原尚子, 1977, (法政大学人文科学研究科)メキシコ市の経済発展とマルヒナル化

- Castles, S. and Kosack, G., 1973, Immigrant Workers and Class Structure in Western Europe, Oxford University Press, 514 pp.
- Karpat, K.H., 1976, The Gecekonu, Rural Migration and Urbanization, Cambridge University Press, 291 pp.
- Roberts, B., 1978, Cities of Peasants, The Political Economy of Urbanization in the Third World, Edward Arnold, 207 pp.
- Stirling, P., 1965, Turkish Village, Weidenfeld and Nicolson, London, 316 pp.

統 計

- State Institute of Statistics, Turkey, 1975a, Agricultural structure and production 1970 - 1972, Ankara
- , 1975b, Annual Foreign Trade Statistics, Serie:1, Imports and exports

- by commodities and countries 1972-1973, Ankara
- , 1977, Annual Survey of the Manufacturing Industry Results (Provinces), Ankara
- , 1978a, Agricultural structure and production 1974 - 1976, Ankara
- , 1978b, Annual Foreign Trade Statistics, Serie:1, Imports and exports by commodities and countries 1976-1977, Ankara

* 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金(総合研究A, 研究代表者 竹内啓一, 課題「地中海地域における集落の形成と発達に関する比較研究」)による研究成果の一部である。